
エンドの先

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドの先

【Nコード】

N2531N

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

垂れた暗幕を切り裂けば、先には一面の光があった。国最強の魔女を倒した戦士と魔女のために己の意志を貫き通した戦士。どちらが悪いのかなど、今はまだわからない。

垂れた暗幕を切り裂けば、先には一面の光があった。

「ついに倒したっ」

「俺達にかかりゃ、こーんなもんよ」

「ありがとう、皆。ここまで共に戦ってくれて」

お決まりの文句が口々に羅列されていく。

己が欲のために、史上最強を誇る魔力で国を震撼させた魔女――

――王の妹の死を以てして、旅は終わりを告げた。

長く途方もない旅だった。この広大な国全てを回り尽くしたと言っても差し支えないだろう。

逃げる敵を必死で追い続けた。いつしか仲間も増え、義勇軍と名乗れるほどになって、王立軍の援護も受けることが出来た。民衆からは感謝され、町へ立ち寄れば歓迎された。

盛り上がる仲間達から少し距離を置き、一人の青年は遙か彼方にある地平を眺め見ていた。うつすらと射す陽の光が夜空を霞ませる。

「綺麗だな」

頭上から降ってきた暢気な声に、青年・カラガンⅡアンミリは反射的に身構えた。

声の主は木の幹へ背を預けた恰好を変えもせず木の実を丸かじりしている。

「……ラーシエルⅡプラム……」

因縁の名を呼べば、ラーシエルは木の上からヒラヒラと手を振った。

「おまえ、何故ここに――」

「大きな声を出すな。あいつらに気付かれる」

カラガンは、今にも木に飛び掛からんばかりにラーシエルを問い

詰めようとしたが、彼の冷めた瞳がそれを制す。

ラーシエルのけぶる金髪は、カラガンの鋼色をした髪と違って日差しを浴びることで美しく煌めく。腰に携えた装飾の剣といい、一見すると細身の優戦士にしか見えないが、彼はれっきとした腕を持つ敵である。敵中でも群を抜く強さを誇り、数多くの仲間を屠^{ほふ}った。カラガンはラーシエルと、最終戦を含めて何度か剣を合わせたことがあった。感情全てを押さえ込んだ瞳に悲哀の一欠けらも見つけることが出来ず、戦慄したものだ。

「皆に突き出してやる」

「ハッ、やれるものならやってみろ。その時は皆殺しにしてやる」
皮肉げに笑って不穏な軽口を叩くラーシエルだが、彼にはそれを実現するだけの力があるのを、今まで彼と戦ってきたカラガンには痛いほどわかっていた。

言い返せず黙りこくるカラガンに視線を投げていたラーシエルだったが、それに飽きたのか、手を取り抱き合い？悪？の終焉を歓喜する者達を眺望し、瞑目した。

「もう、いいじゃないか」

「……………」

「歴史はおまえらを？善？とした。僕らの姫は死んだんだ。完璧におまえらの勝ち。それで満足だろう」

どこか棘のある言葉に嫌な気持ちを感じる。

カラガンは無言のまま木へ足をかけ、よじ登った。

大樹の枝はしっかりとしており、二人分の体重くらいではビクともしない。

木のうろに座っているラーシエルの隣に並んだ。

黄緑色の葉が日に透けて、脈まで浮き出ている。眼前に広がる光景は地上で見るより美しいことこの上なかった。

ラーシエルはかじっていた木の実を弄んでいたが、やがて全てを諦めた表情で呟く。

「これからはたくさん幸せが、この国に訪れるだろうよ」

決して、そんなことはないと言っても言いたげな口調で彼は言った。
カラガンは「敵がそんなこと言う和不吉だ」と抗議しながらラー
シエルの目線を追う。

戦いが終結した今でも痛々しい傷痕を遺す決戦の地・ザシュバラ
ンは遠く。かの地からは絶えず黒煙が立ち昇っている。

「仲間のほとんどがザシュバラで命を落とした。もう、守るべき
姫もない」

ラーシエルは血結晶ピアスを外し、太陽に向かって放った。空し
さがその場に充満する。

「……………呪い姫のことは、痛ましく思っている。彼女がまさか自
害するなど思わなかった」

呪い姫。魔女につけられた異称である。魔女は気に入らない者が
いると呪い殺すということからその名がついた。

尤も、カラガン自身は魔女に対して怒りを感じても、他の仲間の
ように憎しみを抱いたことはない。だから、魔女が自害したと聞いた
時、少しだけ胸を痛めた。こんな内戦が起る前、民衆に飛びき
りの笑顔を送っていた彼女を知っていたから。

ラーシエルは笑った。

「僕は疲れた。あとは勝者共で、どうしても好きにするがいいさ」
その言葉に隠された真意を、カラガンが思い知るのはしばらく経
ってからであったが、その時はまだ、悪が滅んだ幸せな時間まいつに微睡
んでいた。

————ハッピーエンドは木の上で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2531n/>

エンドの先

2010年10月15日20時23分発行